

啓蒙と〈文学〉の間で

— 韓国近代文学における子供 —

丁 貴 連

父祖への絶対的な服従と礼儀を善とする孝の国韓国では、子供の存在を強調することは長らくタブーであった。ところが、一九〇八年十一月崔南善によって、「少年の国」^①が高らかに宣言されて以来、その状況は一変した。崔南善の「海より少年へ」(一九〇八)を皮切りに、雑誌、詩、小説、評論はこぞって少年を主題に取り上げ、李光洙の「少年の悲哀」(一九一七)「幼き友へ」(一九一七)「子女中心論」(一九一八)「少年へ」(一九二二)、田榮澤の「白痴か天才か」(一九一九)など、少年を賛美する作品が次々と書かれた。

しかし、李光洙らが少年たちを賛美するのは、あくまでも封建的な児童観を改めるためであり、独立運動の手段となるからであって、その姿は十九世紀のロマン主義者が主張した無垢なる少年像とは程遠い。このように子供を大人と異なる存在として捕らえる以前に、〈啓蒙〉や教育の対象として見てしまうことの背景には、当時の韓国の現実、すなわち近代化の過程で植民地に転落したという政治

的状況が挙げられるだろう。

例えば、独歩作品と同名小説である李光洙の「少年の悲哀」^②は、韓国の近代文学史上はじめて少年時代から大人の世界へと越境する無垢なる少年時代を顕在化しながらも、作家自身の強い啓蒙意識によって旧結婚制度の批判へと転じる。また、独歩の「春の鳥」の翻案小説と知られる田榮澤の「白痴か天才か」^③は、「白痴」と「少年」を結びつけて、無垢のイメージにつながる子供を描いていながらも、「白痴」の少年に発明の才能を与えるということによって近代化への憧れの問題とすりかえてしまう。こうした児童認識によって、韓国の児童文学が他の国の児童文学と一線を画すところとなったことは否めない。そこで本稿では、韓国近代文学史の中で、子供という観念がどのように文学表現の中に現われたかについて考えてみたい。

一、少年讃歌の時代

一八九四年甲午改革によって近代の幕が上がった韓国では、かつて例のないほどに熱を帯びたまなざしが少年たちに注がれた。少年讃歌ともいべき特有の言辞が論壇を賑わし、作家、宗教関係者、ジャーナリスト、あるいは教育関係者など多くの人たちが少年を主題に取り上げた。

これら少年讃歌統出の端を切ったのは、日本留学帰りの崔南善（二八九〇～一九五七）である。一九〇六年十月、満十六才の崔南善は、入学したばかりの早稲田大学高等師範部地理科を僅か半年で止めて帰国した。朝鮮国王を冒瀆する日本学生への抗議がその理由であったが、帰国船に乗った崔南善の荷物は他の留学生に比べて異常に多かった。なぜなら、東京で買い込んだ様々な印刷機と日本人技術者二人が同行していたからだ。幼い頃から言論と出版に強い関心を示していた崔南善は、帰国直前、父親を口説いて最新の印刷機器を買い揃えたのである。

それから二年後の一九〇八年十一月、崔南善はこの印刷機器を利用して韓国最初の月刊総合雑誌『少年』を刊行した。創刊号の読者が僅か六名に過ぎない小さな雑誌ではあったが、韓国近代文学史を塗り替える画期的な創刊となったことはいくら強調しても強調しすぎることはないだろう。次の刊行趣旨文はそれを象徴的に表す。

我が大韓を少年の国たらしめよ。かくせんとせばよくその責任に堪えうべくそれを教導せよ。

かつて朝鮮社会では、目上の人、年長のものへの絶対的な服従と礼儀が徳目とされ、子供の存在を強調することは長らくタブーであった。こうした考えは近代にはいつてからも衰えることなく依然として幅を利かせていたので、国家を「少年の国」にしようとする主張は、まさに革命的といわざるを得ない。しかし、この宣言を機に、長い間無視されてきた少年たちがようやく日の目を見ることができたのである。雑誌、評論、詩、小説は一斉に少年を取り上げだした。その主なものを列挙すると、次のようになる。

雑誌：崔南善発行『少年』一九〇八『赤いチョゴリ』一九一二
『子供の見る本』一九一三『新しい星』一九一三『青春』一九一四

詩：崔南善作「海より少年へ」一九〇八「新大韓少年」一九〇九

唱歌：崔南善作「少年大韓」一九〇八「我々の運動場」一九〇九
「大韓少年行」一九〇九「海上の勇少年」一九〇九「少年の夏」一九一〇

時調：崔南善作「快少年世界周遊時報」一九一〇

小説：李光洙作「幼き犠牲」一九一〇「金鏡」一九一五「幼き友

へ」一九一七「少年の悲哀」一九一七「尹光浩」一九一八

田榮澤作「白痴か天才か」一九一九

評論：李光洙作「今日我が韓青年と情育」一九一〇「今日我が韓

青年の境遇」一九一〇「子女中心論」一九一八「少年へ」

一九二一

以上の例からもわかるように、雑誌から評論に至るまでいずれの分野においても少年を対象にしている。これはかつてのジャーナリズムでは想像すら出来なかった現象である。金容稷氏によれば、近代以前にあっては、少年が文学作品の主人公になることはめったになかったし、たとえ少年が登場する場合も、そこに描かれた少年像というものは、いわゆる卑下と否定の対象となっている。いざ少年が推挙・賛美された試しはめったにない。しかし、近代に入ってからそのタブーが破られ、少年像は肯定の代表として描かれるようになった。その先駆的な作品が崔南善の「海より少年へ」だとい^⑤う。

ザア、ザア、ザボン、ザア

打つ、砕く、崩れ落ちる

泰山のような高い山も、家塊のような巖も

それが何だ、何なのさ

私の大きい力、知るのが知らないのか、怒鳴りつけながら

打つ、砕く、崩れ落ちる

ザア、ザア、ザボン、ザア（第一聯）

ザア、ザア、ザボン、ザア

あの世の中、あの人みな憎いが、でも一つ愛しうることがある

大胆で純情な少年たちが

愛嬌たっぷりに可愛く、私の胸に迫って抱かれることだ

来い、少年輩、口づけしてやるよ

ザア、ザア、ザボン、ザア（第六聯^⑥）

韓国最初の新体詩と言われる「海より少年へ」は、『少年』創刊号の巻頭詩である。創刊号の巻頭を飾った詩であっただけに、題名からも少年の勇気を鼓舞・賛美していることが見受けられる。

まず、一読して気がつくのは、この詩の中で、「海」の力を借りて少年を賛美していることである。韓国は三面が海に囲まれた半島であるにもかかわらず、海を題材にした作品が甚だ少ない。描かれた作品のほとんどは大陸文明の性格を強く表すいわゆる山水ばかりである。^⑦

ところが、「海より少年へ」は題名からもわかるように、「海」から「少年」に発せられたメッセージである。これは何よりも大陸に

向けられていた韓国人のまなざしが海（近代西洋）に向けられ始めたことを示している点において注目される⁸⁾。

というのは、韓国にとって文明は、数千年間大陸を意味していたからである。しかし、一八七六年開港を契機に、新しい先進国の文物は大陸ではなく、海を通して入ってくるという意識上の変換を迫られた。いわゆるパラダイムの転換である。洋服、洋装、洋式、洋画、洋品など洋物が社会を覆い始めた。「海」は近代文明を意味し、そこからもたらされるものは良い物だという考えが、当時の知識人が到達した結論であった。

日本留学帰りの崔南善が、文学的出発を雑誌『少年』の刊行から始め、その創刊号に少年を主人公にした「海より少年」という詩を掲載している。この事実はまさしく新しい時代の渡来を象徴していると言える。

ところで、崔南善が開花期の少年に特別な関心を示したように、同時代の李光洙もやはり少年を重視した論文や小説を書いていたことは留意すべき点である。とりわけ初期に執筆されたほとんどの作品は「少年文学」といってよいほど少年を主題にしているものばかりである。例えば、「我々の英雄」（一九一〇）「熊」（一九一〇）などの詩、「幼き犠牲」（一九一〇）「金鏡」（一九一五）「幼き友へ」（一九一七）「少年の悲哀」（一九一七）「尹光浩」などといった小説さらには「子女中心論」（一九一八）「少年へ」（一九二一）などの

評論は、いずれも少年を主題にした作品である。とりわけ、小説はまるで「少年もの」という印象を与えるかのような題名の付け方をしているばかりでなく、内容も主人公も、さらに主題もすべて少年が対象である。いずれにしても李光洙の少年への愛着と関心がいかに大きかったかが如実に表れている。

ところで、これらの小説、評論などを一瞥すると、李光洙の少年賛美は崔南善のそれとは別種のものであることに気がつく。すなわち、崔南善が少年への関心を促すために、もっぱら少年を賛美する詩や唱歌、時調（短歌）を作っていたのに対して、李光洙はなぜ少年を賛美しなければならないのか、その理由を評論を持って述べているのである。例えば、李光洙が最初に手かげた「今日我が韓青年と情育」（『大韓興学报』一九一〇）という論説文は、父母への絶対的服従を説く道德教育の矛盾と不条理を指摘し、個人の感情や情緒を重視する教育を行うべきだと主張して周囲を驚かせている。児童文学者李在徹氏は、封建教育に反旗を翻した「今日我が韓青年と情育」こそ近代的児童観の形成に画期的な里程碑を提示した最初の児童論であると評価している⁹⁾。

この反伝統宣言から端を発した李光洙の少年賛美は、「今日我が韓青年の境遇」（一九一〇）「朝鮮家庭の改革」（一九一六）「早婚の悪習」（一九一六）を経て、「父祖中心」の旧朝鮮から「子女中心」の新朝鮮を作ろうと主張する「子女中心論」（一九一八）に至って

絶頂に達する。

旧朝鮮の間違った道徳から新朝鮮の子女を救出することが焦眉の急であると同時に吾が民族万年の運命が分岐する部分である。

まず、子女に独立した自由な個性を与えよ。彼らをして私たちは父祖の所有物だ！という観念を捨てさせて私たちは自分たちの所有物だという観念をもたせよ。次に、子女としての最大の義務は自分自身と自分の子女に対してあり、決して父祖にあるのではないという観念をもたせよ。^⑩

未だ儒教的・封建的な勢力が猛威を振るっていたこの時期に、「旧朝鮮の間違った道徳から新朝鮮の子女を救い出」せと訴えるこうした主張が、孝の国の儒者達を震撼させたことは言うまでもない。また、これほど朝鮮社会を根本から揺るがした衝撃的な話題もなかっただろう。

「子女中心論」のなかで、李光洙は「父祖の所有物」と見なされた従来の子供観に対して真っ正面から異論を申し立て、子供とは本来「独立した自由な個性」を持つはずのものであると、まったく新しい子女観を呈示している。彼のこうした子供観が、当時の知識人の爆発的な賛同を得、それがきっかけで、子供の置かれている現状

を見つめ直そうとする動きが沸き起こったことは、今更繰り返すまでもないだろう。

さて、「子女中心論」によって絶頂に達した李光洙の少年賛美運動は、やがて「朝鮮の運命」は少年にかかっているという少年に対する期待感へと収斂されていく。一九二一年執筆された「少年へ」という長い評論は、経済的・道徳的・知識的に破産状態に陥った朝鮮を救う者は、もはや少年しかいないと、少年達に強い期待感を寄せる。

少年の皆様！現在二十歳以内になる弟と妹たちよ、これから美しい朝鮮の土を踏んで出てくる息子と娘たちよ！私ほもっとも厚い愛と大きい希望と、そして恭しい尊敬でこの言葉を皆様に差し上げます。なぜ！皆様こそ朝鮮の主人であり、命だからです（中略）。

私たちの現在の生活について、また将来の生きる道について、緊急にお話ができるところはどこでしょうか。空ですか、空に言葉はありません。大地ですか、大地に手はありません。大人ですか、大人は老いて力がありません。ですから、私たちのこの切ない事情を申すところは皆さんであり、大事な仕事をお願いするところも皆さんしかいません。皆さんの小さな手には無限の力があります。私たちを救ってくれる者は、ただひたすら

少年の手であり、少年の力のみです。^①

崔南善や李光洙ら新文化運動の旗手たちが標榜してきた課題のうち、もっとも主要なもの一つは、多事多難たる時代に国家と民族の将来を担う新世代としての役割を少年達に自覚させるところにあった。「少年へ」はそうした状況に見合う形で書かれた「少年賛美論」といえよう。

以上のように、少年への関心を促すところから始まった「少年賛美」運動は、「朝鮮の運命」を少年に託すという少年への期待に席を譲ることによって終焉を迎える。

一八七六年江華島条約、一八九四年日清戦争、一九〇四年日露戦争と一九一〇年日韓併合といった目まぐるしい国際情勢の中で、日本留学から帰ってきた崔南善と李光洙は、朝鮮を取り囲む国際状況を見つめ直して、祖国の置かれた状態に愕然とし、「父祖中心」の旧朝鮮に不安を覚えていたのではなかったろうか。そうした不安のゆえに、「少年」という存在に熱いまなざしが注がれたのであれば、何ら不思議なことではあるまい。

二、儒教批判と児童論の台頭

従来否定的に表象されてきた少年のイメージが肯定的に描かれ、なおかつ賛美されるためには、まず、少年に対する社会全体の意識

の改革が必要となる。周知のように、韓国では長い間、封建的・儒教的な体制の中で、女と子供は社会の末端で最も虐げられた。独立した人権が全く認められず、男と大人によって生涯その生活を決められる状態が長く続いた。そこで新文化運動の旗手たちは、儒教的ヒエラルキーの末端で、もっとも虐げられている女と子供を解放することが急務だと気づいたのである。「学之光」を中心とする同時代の雑誌の目次を確認すると、旧道徳・旧思想に対する批判ないし攻撃が目立つ。

例えば、李相天の「新道徳論」(『学之光』、一九一五)、姜女史「女子界にも自由が来た」(『学之光』一九一五)、金鏖洙「新衝突と新打破」(『学之光』一九一五)、李光洙「朝鮮家庭の改革」(『毎日申報』一九一六)、李光洙「早婚の悪習」(『毎日申報』一九一六)、田榮澤「家族制度を改革せよ」(『女子界』一九一七)、朴勝喆「我々の家庭に在る新旧思想の衝突」(『学之光』一九一七)、李光洙「婚姻に関する管見」(『学之光』一九一七)、李光洙「子女中心論」(『青春』一九一八)、李エレナ「女子教育の思想」(『女子界』一九一八)、田榮澤「旧習の破壊と新道徳の建設」(『学之光』一九一八)、柱麟常「古い殻を捨てよう!」(『学之光』一九一九)、金小春「長幼有序の弊害—幼年男女の解放を提唱す」(『開壁』一九二〇)、崔承萬「女子解放問題」(『女子界』一九二〇)、妙香山「従来の孝道を批判して—今後の父子関係を宣言する」(『開壁』一九二〇)、

滄海居士「家族制度の側面観」(『開壁』一九二〇)、李敦化「新朝鮮の建設と児童問題」(『開壁』一九二二)などがそれである。

以上から分かるように、新文化運動の知識人たちは一九一〇年代中頃から一九二〇年代初頭にかけて朝鮮の伝統意識全般、すなわち家族制度、早婚、男尊女卑、孝、長幼の序の問題などを封建時代の悪しき遺産として批判した。特に「家族制度」という考え方は、新しい時代への適応を妨げるものとして攻撃の対象となった。この点に関して同時代の新文化運動をリードしてきた二人、李光洙と田榮澤の議論を取り上げてみたい。

まず田榮澤は、一九一七年に『女子界』に「家族制度を改革せよ」を載せ、家族制度、とくに家長の専制が朝鮮の近代化を妨げていると述べた。その後、さらに「旧習の破壊と新道德の建設」では、「豊かな個性」と徹底した「私」を築き上げるために、旧習の破壊が必要であるとも主張している。そして、破壊すべき旧習としては、「孝」「男尊女卑」の思想、年輩者による若い者への「压制」、「兩班」制度(階級制度)、過度な祖先崇拜、一夫多妻、漢文制度などをあげている。

一方李光洙は、一九一六年に「朝鮮家庭の改革」と「早婚の悪習」、一九一七年には「婚姻に関する管見」及び「婚姻論」、一九一八年は「子女中心論」を立て続けに発表しているが、いずれも家族制度が朝鮮の近代化を妨げていると述べている。具体的にみると、「朝

鮮家庭の改革」では、朝鮮の家長はまるで専制君主のようだと批判した後、家族構成員の意志とそれぞれの個人の人格を尊重することを提案している。「早婚の悪習」では人間生活の生理的側面、倫理的側面、経済的側面に接近しながら、朝鮮の代表的弊習の一つである早婚問題を批判する。「婚姻に関する管見」や「婚姻論」もやはり伝統的婚姻制度が持つ問題点などを批判したもので、これらの婚姻は婚姻当事者たちの意志を尊重すべきであると主張する。そして「子女中心論」に至っては、家族制度と関連した旧習を批判するだけでなく、朝鮮の伝統意識のほとんどを否定し、とりわけ朝鮮の儒教的伝統の中でもっとも重要な倫理の一つと見なされる「孝」の観念を批判し、父祖中心の家族制度から子女中心の制度へ変えてゆかねばならないと主張する。

朝鮮では孝が最上の道德であり、孝の内容は子女たるものが父母の志を承順することであった。父母の生存中は子女にはまったく自由がなく、まるで専制君主下の国民のように父母の思うがままに処理される奴隷や家畜と変わらなかった。父母の生存中だけでなく、死後も三年の居喪という厳法があり、その後は奉祭祀という大義務が子女の時間と精力と金銭を浪費し、活動の自由を甚だしく検束する。従って、孝子になろうとする子女は生涯父祖のため自己を犠牲すること以外に他のことをする余

裕はなかった。(中略)

旧朝鮮の子女はただ父祖のためにのみ生き、働き、死んだ。

父祖の思いがすなわち子の思いであり、父祖の目的はすなわち子の目的であった。⁽¹²⁾

李光洙は本来よき徳目であるはずの「孝」が、朝鮮に入ってから国を滅ぼすまでに因習化されたと断定し、朝鮮に子女の権利などなく、子女は大人のために存在する玩具にすぎないと主張した。そして、父祖中心のあらゆる儒教制度から子女を解放して子女中心の新しい社会を作るべきだと説いたのである。

「子女中心論」の出現によって、それまでタブー視されていた儒教的児童観に対して疑問を提示することが許されるようになった点は注意すべきである。例えば、開化期の知識人金小春は「長幼有序の弊害―幼年男女の開放を提唱す」という評論の中で、「朝鮮千年間我が長者たちは幼年の人格を抹殺し、自由を剥奪した歴史的大罪人であり、悪行者であった」と批判し、その原因を旧倫理道德の残弊、すなわち長幼の序だと断言し、近年女性解放論が盛んなのに対して、児童開放論が伝わっていないのは残念だと締めくくっている。

幼年もまた人間である。二千万兄弟の中の一人であり、将来大きい運命を開拓する人材の中の一人である。彼らの人格を認

めるべきである。どうか彼らと仲良くして長幼の間に新しい道を作らねばならない。このような精神を私たち長者一人一人が持っていれば、長幼有序の弊害による現下の諸悪習は改められるだろう。半島の数百万の幼い男女は、恐ろしい因習の呪縛から開放されるだろう。近日女子開放論が盛んに行われているにもかかわらず、児童開放論が伝わっていないのはなぜだろうか。⁽¹³⁾

儒教の呪縛から女性を解放すべきだという主張は、かなり早い時期から言われていた。すなわち、開化派の旗手朴泳孝が一八八八年朝鮮ではじめて蓄妾禁止と「若い後家さんには再婚を認めよう」と言い出してから、女性解放運動が次第に本格化されるようになった。そして、一八九四年甲午改革の際には社会制度として早婚禁止、再婚の自由などの項目が法的に作られた。⁽¹⁴⁾その後、『学之光』『青春』『開壁』などの雑誌には女性特集号が組まれ、また『女子界』『新女性』などといった女性雑誌が刊行されるなど、早くから女性の権利と権利を守るためのさまざまな活動が行われていた。

ところが、女性以上に悲惨な状態に置かれていた子供にまなざしが向けられるようになったのは、かなり遅れをとって一九一〇年代の中頃に入ってからである。身近なものの方がはるかに捉え難い存在だろうか。とりわけ、孝の国朝鮮では子供はなおさら見えにくい存在であったかもしれない。

この他にも殴る軍団が無数に多く、書堂（寺子屋）にいくと先生と校長がおり、家に帰れば父祖兄弟が順番に待っている。

見ると叱るし、会うと殴るので、金石でさえ傷つかないはずがなく、鋼鉄でさえ堪えられるものだろうか。そうして「子供は三日間殴らないと狐になる」という状態にまで至った。しかしこの現状を誰一人救済しようと言うものはいない。かわいそうだ、憐れだ、これが人の罪なのかそれとも三神（神靈）の罪なのだろうか。⁽¹⁶⁾

長幼の序の下で、子供は「父母が死ぬといえ、死なないまでも死ぬふりくらいしなければならぬ」という言葉があるように、父母の言葉に逆らうことは絶対に許されなかった。朝鮮の大人達は無知と権威を理由に子供を殴り、子供達は理不尽な大人の暴力に為すすべもない無力な存在であった。当時家族制度を取り扱った出版物のなかで、子供への暴力と暴言（悪口）を止めましょうという評論が大半を占めていることはきわめて象徴的である。⁽¹⁷⁾

しかしながら、一九一〇年代に入ってから始まった儒教制度や家族制度の見直し、さらには「孝」の概念が崩れることを契機に、徐々にではあるが、子供は保護されるべき存在として扱われるようになり、大人たちは子供を取り囲む抑圧的な現実に対して問題意識をもつようになったのである。こうした「家族制度」への反発とともに

子供への関心が高まるのを受けて、次第に文学作品の中に子供や子供時代が描かれるようになっていく。

三、啓蒙の対象としての少年

韓国近代小説史上はじめて少年を主題に取り上げた作家は李光洙であるが、彼の描いた少年像が、今日われわれがイメージする「子供像」とずいぶんかけ離れていることは注目し値する。例えば「少年の悲哀」の主人公文浩は、十八才にもなる青年でありながら、少年と自称している。また評論「少年へ」では、二十歳以下を少年と呼びかけている。さらに「幼き友へ」は、本国に妻を残したまま外国をさまよう大学生である。その他「彷徨」、「尹光浩」などの主人公はすべて、少年というよりも、むしろ青年に近い人物である。すなわち、妻子のいる、髭を生やした、いわば「小さな大人」である。これらの「小さな大人」は、崔南善が雑誌『少年』を通して打ち出した、前途多難なる祖国にとって期待される人間、つまり大人となるべき少年像であって、けっして十九世紀のロマン主義者達が主張する子供観ではない。

ところが、同じ時期書かれた「朝鮮家庭の改革」「子女中心論」などの一連の評論を見るかぎり、李光洙は少なくとも大人とは異なる子供の特性について認識していたことがわかる。小説と評論とにみられるこのような差はどのようなようにして生じているのだろうか。

柄谷行人はその著『日本近代文学の起源』の中で、「児童」は「風景」や「内面」とともに近代になってはじめて発見されたものであり、児童（児童文学）が見出されるためには、「まず「文学」が見出されねばならぬ」と述べている。¹⁸ 柄谷の理論を援用するならば、「子女中心論」を書く頃の李光洙は、すでに子供の実体について認識していたと思われる。しかしながら、まだ時代的な制約と個人的な実践力の限界などによって、評論で主張する内容とそれを写す形式の間に乖離が生じていたのではなからうか。この理論（子供の認識）と実践（表現の問題）の二重性ないし乖離は近代文学が成立していく過程のなかで次第に克服されていくが、李光洙はちょうどその境目で文学活動を行っていたいわば過渡期の文学者であった。そこで韓国近代小説史を概観すると、一九〇〇年代の新小説時代を経て、韓国最初の長編近代小説『無情』（李光洙）が書かれる一九一七年まで、主要な小説家は李光洙一人といっても過言ではないぐらい、当時の文壇は全面的に彼に頼っていた時期であった。李光洙もその期待に添えるように、次々作品を発表し、韓国文学を「新文学」という表舞台に引き出してくれた。ただし、留意すべきなのは、李光洙の小説が、実は文学作品として鑑賞されるために読まれたと言うよりも、むしろ何らかの思想を伝える道具や手段として使われていたことである。趙演鉉氏は『韓国現代文学史』の中で李光洙の文学を「説教」文学と結論づけている。

最初に活字化された春園（李光洙）の文章が『情育論』という一種の啓蒙的な論説文であったという事実は春園の文学的な特質を仄めかすよい資料となる。それは、この事実が全く偶然の一致であるかもしれないが、春園の文学的抱負や意欲が最初から純文学的でなかったことを示してくれるその一例になるからである。

（中略）

そして、こうした彼の啓蒙的な特質が李光洙自身に最初から文豪的な性格を持たせたのである。彼が最初に『情育論』を発表したのは、情緒教育を重視せねばならないという啓蒙的な意図からであった。もし彼の意図が小説的な形式を用いることがより一層効果的なものだと思っていたならば、彼は『情育論』のテーマを小説として構成・発表しただろう。彼は文学のさまざまな様式を、説教の一手段として使用し、文学というものを説教のもっともよい道場と考えていたのである。¹⁹

つまり、李光洙は文学者である前に祖国の指導者、啓蒙家、そして先覚者であろうとした。しかし皮肉にも、この指導者意識が李光洙の文学者としての性格を決定づけてしまったのである。彼の小説を読んでいくと、演説めいた文章に出くわす場面が多い。例えば「幼き友へ」は、忘れられない初恋の追憶を幼き友に告白するとい

うごく簡単なストーリーの作品であるが、途中これが小説なのか恋愛論なのか目を疑うほど延々と説教する場面に遭遇する。甚だしくは韓国最初の近代小説と評される『無情』でさえ結末は論説調の文章で終わっている。

ああ！、わが国は日々美しくなる。私達のか細い腕は日々強くなり、暗かった精神は日々輝く。私達はとうとう他の人と同じく光り輝くことになった。

だからこそ、われわれはもっと頑張らねばならない。もっと偉い人物、偉い学者、大教育家、大実業家、大芸術家、大発明家、大宗教家が生まれてこなければならぬし、もっともっと生まれてくるようにしなければならない。⁽²⁰⁾

こうした自我陶醉した演説のような文章が小説の随所に挿入されている。つまり、李光洙という作家は小説内容で読者を感動させるのではなく、論説で説得した、いわば啓蒙作家なのであった。李光洙の啓蒙意識に関してはすでに第二章で見てきたとおり、ここで改めて論じるまでもないが、彼の主張するものは、父祖中心の古い封建社会を打ち破って子女中心の新しい社会を作るという一点に尽きるだろう。

魯迅が「われわれは今日どのように父親となるか」（一九一九年）

という論説文で、自分たちの子供を解放してやろうではないかと、限りなく犠牲的な父親の視点を持ち出したのに対して、李光洙は「必要ならば祖先の墳墓も暴き、父母の血肉もわれわれの糧とせねばならぬ」と、父祖を痛烈に批判する子女、すなわち子供の視点を強調していることは象徴的である。中国と朝鮮で、ともに近代文学の嚆矢といわれる作品を書いていたこの二人の作家が、「父親意識」と「子供意識」⁽²¹⁾という相反するテーマをもって文学者として出発し、しかもそれがその後の二人の文学の行方を決定付けるものになってしまったことは皮肉といわざるを得ない。

それはともかくも、啓蒙作家としての李光洙の描いた「少年もの」が、主題としての少年や少年時代をリアルに描いたものではないことは改めていうまでもない。そこに描かれた主人公たちは、旧結婚制度の犠牲者ないし被害者として、因習への痛烈な批判を加えるか、あるいは自由恋愛を主張するかのどちらかである。なかでも「幼き友へ」はその典型的な作品で、主人公の青年は本当の愛に目覚めた時には、すでに既婚者というレッテルが貼られ、愛を成就できなかったと嘆く。そして、本妻との結婚は父母の一方的な契約によって成り立ったものであって、その結婚生活には愛情のかけらもない。したがって、そういった結婚制度は呪うべきものであり、破壊せねばならないと主張する。「少年の悲哀」「彷徨」「尹光浩」なども程度の差はあれ、因習的な封建制度を批判したり、自由恋愛を主張したり

する点においては同じである。ただし、「少年の悲哀」だけは例外であった。

独歩の「少年の悲哀」との間に影響関係が取り沙汰されているこの小説では、文浩という一人の少年が聡明で愛らしい従妹の蘭秀にひそかに恋をする。しかし、彼女は父母が勝手に決めたある智恵遅れの少年と結婚することとなる。そのため、文浩はやるせない悲哀を感じるという内容の作品である。文浩の悲哀が早婚に象徴される因習的な結婚制度によって生ずるものだという点において、この作品の構造は「幼き友へ」やその他の小説と変わらない。ただし、この作品が初期の他の小説と一線を画すところは、こうした社会弊習を「少年」の目を通して批判していることであろう。

李光洙は『無情』の中で、高校の英語の教師である主人公が、自分と自分の世代を「幼い子供」と呼ぶなど、子供の視点をを用いている。⁽²³⁾ 李光洙が用いたこの「子供の視点」は、今現在力をもっていない弱いものたちが、これから力をつけてゆくという意味での「幼い子供」であって、決して無垢なる存在としての子供ではない。しかし、「少年の悲哀」のなかの「少年」には、かならずしも十九世紀のロマン主義者が主張する無垢さを現在化した少年ではないにしろ、未熟ながらも近代的な少年の特徴が表象されている。

蘭秀は愛らしくおとなしい才能ある処女である。その従兄な

る文浩は従妹たちを愛するが、その中でも特別に蘭秀を愛する。文浩は現在一八才なる田舎のある中等程度の学生であるが、彼は未だに青年と呼ばれるのを嫌って少年と自称する。彼は感情的で多血質の才能ある少年として、学校成績も毎回一、二等を競う。彼はまだ女と言うものを知らず、彼が交際する女子は従妹たちとその他四、五人なる族妹である。(中略) 文浩はどこへ行ってもじっとしない性急な癖であるが、姉妹たちと一緒にいると、時間の経つことさえ分らないぐらいである。彼は学校で聞いたこと、または書物で読んだことの中から面白い話を姉妹たちに聞かせて笑わせるのが好きで、姉妹たちもそんな文浩が好きである。だから、文浩が家に帰ってくると村中の姉妹が皆集まる。⁽²⁴⁾

ここには父祖への服従と礼儀を理想とする儒教的な児童観は微塵もなく、文学をこよなく愛する思春期の少年の従妹たちと交流する姿が生き々と描かれている。大人の使い走りとしか思われなかった少年像を、ここまで美しく表象しあげたのは韓国文学史上はじめてのことであろう。つまり、李光洙は「少年」、すなわち子供時代を見出していた。

ところが「少年の悲哀」は、後半に行くと、文浩をめぐる従兄妹たちとのほのぼのとした交流から一変して旧結婚制度の批判へと転

じてしまう。ただし、「幼き友へ」や『無情』に見られる説教調でなく、あくまでも文浩という「少年」の目を通して、大人の価値観に対する疑問や異論が提示されることに注意すべきだろう。

その年の秋、従妹蘭秀が父母が勝手に決めた結婚者である智恵遅れの少年と結婚することとなった時、文浩は必死になってそれを止めようとする。

しばらく経つと新郎となる者が智恵の足りない白痴だという話が聞こえてくる。家中のものが皆心配した。(中略) 文浩はこの話を聞いて泣きながら叔父に懇願した。しかし、叔父は「出来ないんだ。両班の家で一度承諾したことに対しては後引き出来ない。これも蘭秀自身の運命だからね」と言った。それに対して文浩は、「でも、両班の体面は暫時のことでしょう。蘭秀のことは一生に関わることでないでしょうか。一時の体面のために一人の人間の一生を台無しにするなんてとんでもないことですよ。」と言いましたが、叔父は腹を立てながら「人力ではできないものだ。」と言い、二度と文浩の話を聞こうとしない。文浩は「その体面というもの」が憎かった。そして、一人で泣いた。⁽²⁴⁾

親の意思が絶対視される結婚制度と、能力があっても女子ゆえに

学校へも行けない男尊女卑の制度を頑なに固執する大人たちに対して、文浩は強く反発する。しかし、幼い文浩の精一杯の抵抗は空しくも大人たちに通じることはない。やがて蘭秀はその男に嫁いでいき、文浩も留学の道につく。このように読んでいくと、この作品は他の小説と同じく啓蒙小説にすぎない。しかし、果たしてそうなのか。実は文浩の悲しみの真意が結末部分に隠されている。

翌年春、文浩は東京に留学して二年後の夏に帰ってきた。(中略) しかし、三年前の楽しみは永遠に過ぎ去ってしまった。文浩は泣きたかった。しかし、三年前のように涙が出ない。文浩は向かい側に座っている文海の黒い髯を眺める。そして、手で顎を触りながら、「文海、もう俺達の顎にも髯が生えてきたよ」と言って伸びてきた髯を引っ張りながら笑う。文海も今昔の念を抑えきれず黒く生えてきた髯を触る。少女たちも二人が髯を触る様子を見て笑う。しかし、彼女達は二人の笑いの意味などわからない。(中略)

「ああ、俺達もうおやじだよ、少年の天国は永遠に過ぎ去ってしまった」と言って笑っているが、目には涙がいっぱいである。⁽²⁵⁾

従来「少年の悲哀」は、従妹蘭秀との淡い恋が封建的で因習的な

結婚制度によって破れた悲哀を、一児の父親になって追憶する小説といわれてきた。⁽²⁶⁾しかし、文浩の悲しみは決して従妹蘭秀との淡い恋が終わったことに対する悲哀でもなく、少年時代の純粹さ、美しさとの決別でもない。そこには、これから「無知と非情」な大人の世界に組み込まれていかねばならない者の悲しみが感じられる。つまり、「少年の悲哀」は、少年の世界から大人の世界へと、境界を越える時に誰もが味わわなければならない辛さや悲しみが、巧妙に描かれているのである。

要するに「少年の悲哀」においては、李光洙は明らかに少年時代を意識していた。ただし、民衆の指導者としての強烈な自我が必要以上に頭を擡げているために、大人の世界に越境する少年時代を顕在化しながらも、啓蒙の対象としての少年像へとすり替えてしまったのである。これは啓蒙文学者としての李光洙の悲劇と言わざるを得ない。したがって、子供らしい子供の登場は、李光洙の啓蒙文学を徹底的に否定する『創造』派の出現まで待たねばならない。

四、理想と現実の狭間で

一九一九年二月、東京で創刊された『創造』は当時日本に留学中の金東仁、朱耀翰、田榮澤ら仲間五人によって作られた韓国最初の純文芸同人雑誌である。留学仲間同士が、しかも外国で作ったせいもあるうか、創刊号から外国文学者の名前が目につく。日本文学に

限っても、創刊号に国木田独歩を日本の自然主義の先駆者だと紹介したことを皮きりに、島崎藤村（一号）、岩野抱鳴（二号）、有島武郎（八号）などの作品が翻訳されている。⁽²⁷⁾紹介されている作家がいずれも近代日本文学における自然主義ないし、私小説の作家であることに、雑誌『創造』が目指した文学が如何なるものなのかが見て取れる。金東仁が刊行経緯について述べている部分を見てみよう。

私達が示そうとしたものは、決して新旧道德や自由恋愛を主張するというような消極的なものではなく、人生の問題と煩悶であった。（中略）

このように我々は小説の題材をくだらない朝鮮社会の風俗改良に置かないで、「人生」という問題と生きていく苦痛を描いてみようとした。勸善懲惡から朝鮮社会の問題提示へ――再び一転して朝鮮社会の教化へ――このような道程を踏んだ朝鮮小説はとうとう人生の問題提示という本舞台に立った。⁽²⁸⁾

このように、『創造』は社会教化を目的とした李光洙らの啓蒙文学から脱皮し、人生という問題をありのままに表現するリアリズムの文学、すなわち近代文学を目指した。同人の中で最も多い作品を発表していた田榮澤は、未だ強い勢力をもっていた恋愛話や啓蒙・教化の小説を拒否して、当時朝鮮社会が抱えているさまざまな現実

問題に関心を示し、それを表現しようと努めた中心的な作家である。二号に載せられた「白痴か天才か」(一九一九)は、まさにこれま
でになかった見方でもって人間というものの、人生というものを捉え
ようとした最初の近代文学といってよからう。ただし、この作品は
独歩の「春の鳥」を翻案したという事実が先走り、作品そのものに
対する評価は十分に行われていないのが現状である。⁽²⁹⁾しかし、拙稿
「白痴教育」と文学」で実証したように、「白痴か天才か」は子供
と教師の触れ合いを通して近代化に遅れをとっていた韓国の現状を
浮き彫りにした作品であるという点において注目したい作品である。
「白痴か天才か」はどんな物語なのか、あらずじをまとめてみよ
う。ありとあらゆる職業を経験した後に教師となった△私▽は、あ
る山村の小学校に赴任して、子供たちを教えることになる。そこで
七星という少年と出会う。七星は知恵遅れの少年であった。学校の
教頭の甥で、その母親は夫に死別してから二人の子供と一緒に兄の
世話になっていた。そのうち、△私▽は母親に頼まれて七星の教育
に骨を折ることになるが、それはあまりうまく行かない。七星は、
珍しいものに対してはどうあっても必ずそれを分解せずにはいられ
ないほど強い好奇心を持っている少年で、他人の時計や万年筆を勝
手に盗んで分解して壊してしまう。また一方では「漕がなくても動
く」おもちゃ船を作ったりするのが上手な少年でもあった。ある秋
の日、△私は▽七星が小川の砂浜に座って、飛んでいく雁の群れを

眺めながら独りで唄を歌っている姿を見かけ、その天使のような美
しさに心打たれる。「少年は自然の児」だとつくづく思う。冬のあ
る日、七星が日暮れになっても帰らないということで、村中が大騒
ぎになり、△私▽は不吉な予感を抱きながら捜しに出かけるが、平
壤へ行く途中で凍死している七星の死骸を見つける。七星は周囲の
あらゆる束縛から逃れようとして、ついに死に至ったと△私▽は考
え、今ごろあの世で自由に好きなことをしながら暮らしているので
はあるまいかと思い、その学校を去る。

このあらずじからも推測されるように、「白痴か天才か」は、「白
痴」と少年を結びつけて、無垢のイメージにつながる少年像を描い
ていながら、その「白痴」の少年に発明の才能をあたえ、問題は近
代的な教育を施すという近代化の方にずらされていくというような、
いわゆる二重のテーマを内包している作品である。つまり、「白痴
か天才か」という小説は、無垢につながるイメージと、近代化への
憧れという二重性を持っていると言えよう。

そこで、七星の描き方から、この二重性について考えてみたい。
七星は言葉がよくしゃべれない、数字の観念がない、論理的な展開
ができないといういわゆる生まれつきの「白痴」として設定されて
いる。しかし、作者はそのような白痴の少年を無垢のイメージにつ
ながる天使として捉えている。これはかつてなかった見方である。

晩秋の夕陽である。空は澄んでいて、鳥の声一つ聞こえず、周囲が静かで、誰かが優しい声で唱歌を歌っているのが聞こえてきました。(中略) その歌声の主が七星だとうわかるでしょう。七星の声があんなにきれいだとは知りませんでした。

空の色、夕日の光、澄んだ小川、古い柳の木、そこに少年、灯籠の絵です。少年は天使です。

私はそっと柳の木のそばへ行ってみました。七星は砂浜にゆったりと腰を下ろしていました。私の目には如何しても七星が白痴のようには見えませんでした。私は心の中で、『あ！君も自然の児だね、君こそ詩人だね』と思いました。⁽³¹⁾

ここに描かれた少年は、雑誌『少年』の表紙を飾った向上心あふれる少年でもなく、国家の運命を背負われた人物でもなければ、それはまさに十九世紀のロマン主義者が前提としてきた純真で弱い子供の造型である。

近代にはいつてから、子供は保護し、教育せねばならない「未熟な存在」として認識されるようになった。⁽³²⁾ しかし、一九一〇年代の朝鮮の子供たちは未だに根強い儒教倫理の下でほとんど「白痴」同然の生活を強いられてきた。だからこそ、崔南善や李光洙が少年を賛美し、儒教のヒエラルキーから解放すべきだと主張したのである。しかし、彼らが打ち出した少年像は、前途多難たる祖国にとって期

待される人間、すなわち「小さな大人」としての子供のイメージであって、決して無垢なる存在としての子供のイメージではなかった。この「小さな大人」としての少年像から抜け出して、後の児童文学者が前提とするような、大人と対比される子供の純真さを描いたのが田榮澤であった。

ところが、かつて一度もはっきりと表象されることのなかった子供のイメージを描くことは用意なことではない。すでに触れたように、「白痴か天才か」の白痴の少年七星は、独歩の「春の鳥」の主人公六蔵をほとんど下敷きにして造型された人物である。⁽³³⁾ 恋愛物語や啓蒙小説が幅を利かせていた時期、田榮澤はなぜ「白痴」の少年を主人公にした作品を執筆したのだろうか。それは「白痴か天才か」の執筆時期と深く関わっている。

一九一〇年、日本の植民地になってしまった韓国では、一九〇五年頃から大小の反日運動があちこちで展開される他に、一方では日本との差を認識させられた知識人達が近代化を推進させるためには教育しかないと思いこみ、全国的に「愛国啓蒙運動」「教育救国運動」を展開していた。⁽³⁴⁾ この事実を裏打ちするかのように、当時日本で発行されていた東京朝鮮留学生機関誌である『学之光』の一九一四年から一九一九年までの間の目次には、「英米人及び他国人の子女教育比較」「科学界の一大革命」「天才よ！天才よ！」「常識と科学」「ダーウインの淘汰論と社会的進化」など、いわゆる科学と天

才、さらに教育に関する記事が目立つ。当時の韓国の知識人達が、いかに近代化を目指して科学や教育に力を入れようとしていたかが推測される。「白痴か天才か」はまさにこのような状況と歩調を合わせるようにして生まれた作品である。この「近代化」と「教育」という解釈の幅に、「白痴か天才か」の二重性を感じ取ることができるのである。

田榮澤は、独歩の「春の鳥」の白痴の少年六蔵の造型を通して、子供を「白痴」のように純粹で弱い存在として認識し、そのような弱い子供は大人が保護し、教育せねばならないと思うようになったのである。そしてこの子供を保護・教育するという考えが、当時都市部を中心に大々的に展開されていた「愛国啓蒙運動」や「教育救国運動」と結びついて、子供の能力を生かして新国家を建設するという「近代化」の問題へとつながっていくのである。当時の知識人の間では、教育こそ日本の植民地から解放される源であるという意識が支配的であった。ただし、問題はそれはあくまでも一部の都会を中心とした知識人の意識であって、民衆の方までは浸透していなかったということだ。

教頭というやつは見た瞬間、天下にこれ以上ないけちのようでした。(中略) この村の人々たちは皆非常に高慢だという話と、教師をまるで乞食のように思い、侮蔑するという話も聞き

ました。子供でさえ大人の感化を受けて教師などは軽蔑し、かなりばかにするという話と、学校が冬には非常に寒いという話も聞こえてきました。⁽³⁵⁾

このような、劣悪な教育環境にさらされている民衆を、啓蒙することはそう容易なことではない。そこで田榮澤は誰も関心を寄せなかった「白痴」を主人公に設定し、しかもその白痴の少年に発明の才能をあたえ、なおかつ教育するという一見変わった書き方をする。要するに、田榮澤は未だに無知と貧しい環境に置かれている韓国の民衆に向けて、たとえ「白痴」に見えようとも、その内部に秘められた能力や素質を引き出して、より良い教育と環境を提供すれば、その子は近代韓国の国家建設のために役立つ人材になるという夢を与えたかったのではなからうか。しかし皮肉にも、田榮澤の夢は現実と理想の狭間で敗れてしまう。

七星は冷たい風が強く吹く冬、雪の積もっている柳の木の下で体を小さく屈め、両手をすり合わせてホウホウと息を吹きかけながら、ぶるぶると震えながら死んでいた。その姿を見届けたのは、ひたすら寝ないできらきらと輝いていた空の星たちでした。

哀れな七星は今ごろ、自分のやっていることを邪魔するお母

さんもない、自分を殴る叔父や先生もないし、自分をからかう仲間もないところへ―あの―雲の上の上へ上がって、思いきりしたいことをしながら気楽に過ごしているのではない⁽³⁶⁾か。

七星は「平凡な子供」ではなかった。しかし、それを理解する人も環境も、七星の住むところには存在しなかった。これが現実であった。こうした現実社会から逃れて「思いきり壊してみたり、思うままに作ってみたり、そしてかわいい箱をたくさん集め」たいという七星の夢は、必然的に死を意味する。

田榮澤は後に、「人生問題をありのままに」映すために「白痴か天才か」を書いてみたと述べているが、七星が誰もいないところで「ぶるぶる震えながら死んで」いく姿は、まさしく現実の子供のありのままの姿に間違いない。

評論の中では賛美され、理想化されても、現実の子供達は七星のように、悲惨な状態に置かれている。それを小説家たちが意識するようになった。田榮澤が七星を凍死させたのは、この理想と現実の差異を認識していたからであろう。この現実認識こそ啓蒙文学からの脱皮にはかならない。

五、アへ（児孩）からオリニ（子供）へ―結びに代えて

昔から韓国には子供を指す言葉が多く、児孩、幼年、赤子、小児、など、さまざまな呼称で呼んできたが、いずれも子供を見下げる卑称である。こうした卑称に真正面から反旗を翻したのが、児童文学雑誌『オリニ』（一九二三―一九三四）を創刊した方定煥である。

方定煥は「アへ」に代表される呼び名には、子供を卑しく思い、粗末に扱ってもよいというような世間の無言の約束があると断定した上で、子供を尊い存在と見なすためには、まず用語から変えていかねばならないと考え、「어린이」（オリニ）という新しい言葉を作った。⁽³⁷⁾

オリニのイ（이）という文字は、늙은이（老人）、높은이（偉い人）、젊은이（若い人）、착한이（善人）などの単語からわかるように、「人、人方」のような意味を表す、いわゆる独立した人格を持った人を指す言葉である。韓国の子供たちは、この「オリニ」という言葉によって、ようやく一個の人格を持った存在として認められるようになったのである。つまり、近代的な児童観を獲得したわけであるが、この言葉が広く社会一般に認識されるようになるためには、一九一〇年代から一九二〇年代にかけての雑誌『学之光』を中心とした新文化運動の旗手たちの儒教批判とともに、一九二〇年代の近代文学の確立は不可欠なものとなる。

一九二〇年代に入ると、崔南善・李光洙らの啓蒙文学への反動として純文学運動が活発に展開される。雨上がりの筈のように夥しい雑誌が続出し、リアリズム、自然主義など文芸上の新しい主義や理念が次々紹介された。その中心的存在が『創造』であったことはすでに前章で述べたとおりである。

ところが、『創造』が韓国における近代文学の紹介・成立に大きな役割を果たした雑誌であることはよく知られているが、近代的な子供観の誕生を促した雑誌であったことについてはほとんど知られていない。例えば、第二号に掲載された田榮澤の「白痴か天才か」は、子供の無垢をはじめて顕在化した作品であり、さらに第八号には有島武郎の「小さき者へ」（『新潮』一九一八）が翻訳され、大人と異なる「子供」の世界が紹介されている。

しかし、こうした事実が児童文学者には意外と認識されておらず、韓国の児童文学は、崔南善の「少年文学」から、突如方定煥の「天使的童心主義」へと発展した⁽³⁸⁾というような明らかに間違った主張がなされているのである。

すでに見てきたとおり、韓国における子供のイメージは、一九二〇年代になると変化の兆しが見える。崔南善や李光洙の作品に描かれた向上心あふれる「小さな大人」としての子供のイメージは、弱い純真な子供のイメージに席を譲ることになる。その分岐点となった作品が『創造』に掲載された田榮澤の「白痴か天才か」であった。

つまり、韓国の近代文学に現われた子供のイメージは、「白痴か天才か」を基点に、近代的な子供観を獲得することができたのである。丁度その頃、子供を指す用語が、「アヘ」という卑称から、「オリニ」という新しい言葉へと生まれ変わっていた事実は、子供という観念が一応社会的に認識されたことを示している。それを理念として集大成したのが、一九二三年創刊された児童文学雑誌『オリニ』であったことは周知の事実である。

参考文献

(1) 崔南善「少年刊行文」(『少年』ソウル、新文館、一九〇八年十一月)。

(2) 金松岷「初期小説の源泉研究」(『現代文学』百十七号、ソウル、一九六四年九月)。

宋百憲「春園の「少年の悲哀」研究」(『大田工專論文集』三輯、ソウル、一九六八年)。

丁貴連「韓国の近代文学に及ぼした国木田独歩の影響Ⅲ－李光洙の場合」(『文学研究論集』第十二号、一九九五年三月)。

「韓国の近代文学における国木田独歩の受容の諸様相－田榮澤、金東仁、李光洙を例として」(『朝鮮学報』)

百五十六輯、一九九五年七月。

「少年時代への憧憬―同名小説『少年の悲哀』をめぐって」(『稿本近代文学』第22集、一九九七年十二月)。

- (3) 金松岨「白痴か天才か」の源泉探索」(『現代文学』百号、ソウル、一九六三年四月)。

丁貴連「白痴教育」と文学―田榮澤『白痴か天才か』と独歩『春の鳥』との比較文学的考察」(『文学研究論集』第十三号、一九九六年三月)。

- (4) 前掲載註(1)と同じ。

- (5) 金容稷「海より少年へ」の理解」(『崔南善と李光洙の文学』ソウル、セムン社、一九八一年) 三二―三五頁。

- (6) 崔南善「海より少年へ」(『少年』ソウル、新文館、一九〇八年十一月) 二―三頁。

- (7) 前掲載註(5)と同じ。三三頁。

- (8) 金充植「六堂と『少年』」(『李光洙とその時代』ソウル、ソウル出版社、一九九九年) 四八七―四九〇頁。

- (9) 李在徹「児童文化運動時代」(『韓国現代児童文学史』ソウル、一志社、一九八七年) 五九―六一頁。

- (10) 李光洙「子女中心論」(『李光洙全集』ソウル、三三堂、一九六四年) 四二頁―四三頁。

- (11) 李光洙「少年へ」(『李光洙全集』ソウル、三三堂、一九六四

年) 二二八頁。

- (12) 前掲載註(10)と同じ。四〇頁。

- (13) 金小春「長幼の序の弊害―幼年男女の解放を提唱す」(『開壁』第二号、ソウル、開壁社、一九二〇年七月) 五八頁。

- (14) 朴泳孝は、一八八八年の正月に亡命先日本から国王に、国政改革について論じた「建白書」を書いているが、そのなかで、女性差別について次のように論じている。

「臣はなお、人民をして通義を得せしむるために、いくつかの事について述べなければなりません。一つには、男女、夫婦は、その権を均しくすべきだということです。およそ男女の嫉妬心は同じです。しかるに男は妻があるのに妾を娶り、あるいは妻を疎んじて追い出す。ところが女子は再婚すること、離婚することもできないのです。法律では女子の姦淫だけを禁じながら、男子の乱交は禁じていません。かつ男は妻が亡くなれば再び娶ることができるのに、女は夫が亡くなると、まだ夫婦の契りか結ばれていなくても、再婚することができないのです。家族親族が制止するからです」姜在彦『朝鮮の歴史と文化』(明石書店、一九九六年) 一七五頁より再録。

- (15) 甲午改革：一八九四年七月から一八九六年二月に至るまで行われた一連の改革を甲午改革といい、少なくとも制度上では

この改革によって、封建的な旧体制が解体され、近代的な諸制度が実施された。政事の面では、宮内府と行政府とを分離

して行政府の管制改革を行ったこと、管理登用においても、

儒教による科举制度を廃止して普通試験及び特別試験制で両

班、常民の別なく人材を登用したこと、行政権から司法権を

分離して罪人連座制を禁止したことなどを実施した。また経済

の面でも、度支部（大蔵省）による財政の一元化と予算の編

成、銀本位制による貨幣制度の整備、租税の金納化などが行

われた。社会制度の面でも、奴婢法の廃止と人身売買の禁止

早婚の禁止と女性の再婚の自由、及び封建的身分制の廃止な

どが行われ、従来の儒教教育に代わる新しい内容の近代的学

校制度が実施された。姜在彦『朝鮮の歴史と文化』（明石書

店、一九九六年）二五〇～二五二頁参照。

(16) 李相天「新道徳論」(『学之光』東京、学之光社、一九一五年)。

(17) 『開壁』第二号から十号に掲載された評論のうち、子供の問

題を取り扱ったもののほとんどが、子供への暴言と暴力の禁

止を強く主張している。

「長幼有序の弊害―幼年男女の解放を提唱す」二号

「家族制度の側面観」三号。

「従来の孝道を批判して―今後の父子関係を提言する」四号。

「世界と共存するために教育問題を再挙して―まずは書堂

(寺子屋) 改良を絶句する」五号。

「幼年教育策如何に」十号。

(18) 柄谷行人「児童の発見」(『日本近代文学の起源』講談社、一

九八〇年)一四四頁。

(19) 趙演鉉(『韓国現代文学史』ソウル、成文閣、一九六八年)

一六五頁。

(20) 李光洙『無情』(『李光洙全集一卷』ソウル、三中堂、一九六

四年)三一八頁。

(21) 波田野節子「獄中豪傑の世界―李光洙の中学時代の読書歴と

日本文学」(『朝鮮学報』第百四十三輯、一九九二年四月)。

(22) 前掲載註(21)に同じ。

(23) 李光洙「少年の悲哀」(『李光洙全集十四卷』ソウル、三中堂

一九六二)十一頁。

(24) 前掲載註(23)に同じ。十六～十七頁。

(25) 前掲載註(23)に同じ。二一～二二頁。

(26) 宋百憲「春園の『少年の悲哀』研究」(『大田工專論文集』第

三輯、一九六八年)。

安承徳「少年の悲哀考―自叙伝的要素および主題を中心に」

(『国語国文学』七七号、一九七八年十二月)。

(27) 朱輝翰「日本近代詩抄(1)(2)」(『創造』第一・二号、東

京、創造社、一九一九年二月・三月)。

- (28) 金東仁「朝鮮近代小説考」(『金東仁全集八巻』ソウル、弘子出版社、一九六八年)五九二頁。
- (29) 田榮澤の「白痴か天才か」は、一九六三年金松岷が「白痴か天才か」の源泉研究」のなかで、国木田独歩との影響関係を取り上げて以来、独歩との関係に引きずられて、作品そのものの独創性が全く無視されている。しかし、「白痴か天才か」は、韓国近代文学史を論ずる際に、必ず引用されるという事実を考慮すると、独歩作品との影響関係を含めて、今後本格的に研究されねばならない問題点を多く含んでいる。例えば、韓国近代文学史上最初の「愚者」は、「白痴か天才か」の七星であるが、今のところ関連する論文はまったくといってよいほど見あたらないのが現状である。
- (30) 拙稿「白痴教育」と文学―田榮澤『白痴か天才か』と独歩『春の鳥』との比較文学的考察」(『文学研究論集』第十三号、筑波大学比較理論文学会)一九九六年月。
- (31) 田榮澤「白痴か天才か」(『創造第二号』東京、創造社、一九一九年三月)二八頁。
- (32) P・アリエス『子供の誕生』(みすず書房、一九八〇年)。
- (33) 拙稿「白痴教育」と文学」のなかで、白痴の少年七星は、目の据え方と奇妙な笑い方、数の観念の欠如と言語障害、好奇心や執着心が異常に強いこと、学校生活に耐えられないこと、そして白痴の原因を遺伝と環境だとしている点において、紛れもなく六歳を下敷きにしていることが証明された。
- (34) 尹弘老「作家意識形成の背景」(『韓国近代文学研究』二〇年代リアリズム小説の形成を中心に)ソウル、一潮閣、一九八〇年)二二頁。
- (35) 前掲載註(31)に同じ。二三―二四頁。
- (36) 前掲載註(31)に同じ。三〇頁。
- (37) 李在徹、前掲載註(9)に同じ。八五頁。
- (38) 李在徹、前掲載註(9)に同じ。七一頁。
- (33) 拙稿「白痴教育」と文学」のなかで、白痴の少年七星は、目の据え方と奇妙な笑い方、数の観念の欠如と言語障害、好奇心や執着心が異常に強いこと、学校生活に耐えられないこ

요지

계몽과 <문학> 사이에서 — 한국근대문학에 있어서의 아동의 발견

정귀련

본고는 유교를 바탕으로 한 동아시아 문화권에 있어서의 <아동의 발견>이라는 테마를, 특히 유교의식이 철저했던 한국사회에서 근대적인 아동관이 어떻게 형상화하였는가를 고찰한 것이다. 장유유서를 기초로 한 조선시대의 아동관은 부모님에 대한 절대적인 복종과 예의를 최고의 덕목으로 삼았다. 어른들은 아이들에게 복종하기만을 강요하고 어린이의 존재를 강조하는 것은 타부로 생각되었다.

하지만 1908년 11월 최남선에 의해 「소년의 나라」가 드높이 제창된 이래 상황은 일변했다. 최남선의 「해에게서 소년에게」(1908)를 시점으로 전국의 잡지·시·소설·평론은 거의 대부분이 소년을 주제로 채택하여 그들을 찬양하기 시작했다. 이광수의 「소년의 비애」(1917) 「어린 벗에게」(1917) 「자녀중심론」(1918) 「소년에게」(1921)와 전영택의 「천치? 천재?」(1919) 등 소년을 주인공으로 한 작품이 줄지어 출판됨으로써 어린이에 대한 인식의 변화가 일어나기 시작했다.

그러나 이광수를 비롯한 신문화 운동가들이 찬양한 소년들은 19세기의 낭만주의자들이 주장한 순진 무구한 소년상과는 거리가 먼 어디까지나 봉건적인 아동관을 고치기 위한 찬양이며 독립운동의 수단을 위한 찬양이었다. 이처럼 어린이를 어른과 다른 존재로서 파악하기 이전에 <계몽>과 <교육>의 대상으로 인식해 버리는 배경에는 당시의 한국의 현실 즉 근대화의 과정에서 식민지로 전락했다는 정치적 상황을 들 수가 있을 것이다.

예를들면 구니키다돗보의 작품과 동명소설인 이광수의 「소년의 비애」는 한국의 근대문학 사상 처음으로 소년시대에서 어른들의 세계로 월경하는 순진무구한 소년시대를 표상화하면서도 작가 자신의 강한 계몽의식으로 인하여 구 결혼제도의 비판으로 방향을 바꾸어 버린다. 한편 돗보작품 「봄의 새」의 변안소설로 알려진 전영택의 「천치? 천재?」는 <백치>와 <소년>을 접목시켜 순수하고 무구한 이미지로서의 소년상을 드러내면서도 백치 소년에게 발명 재능을 안겨줌으로서 <근대화>에의 동경이라는 문제로 슬쩍 바뀌친다.

이와같은 아동관은 한국에 있어서의 아동의 발견을 늦추었을 뿐만 아니라 다른나라의 아동문학 특히 일본의 아동문학과 일선을 긋는 경계선이 된 점은 부정할 수 없다. 이 문제에 관해서는 앞으로 비교문학적인 관점에서 검증할 필요가 있을 것이다. 본고는 그 전단계로서 한국에 있어서의 아동의 발견을 밝힌 것이다.

(1999년 11월 1日受理)